

「VP 付加の代替操作について」

石 岡 精 三

—An Alternative to VP Adjunction—

S. Ishioka

0

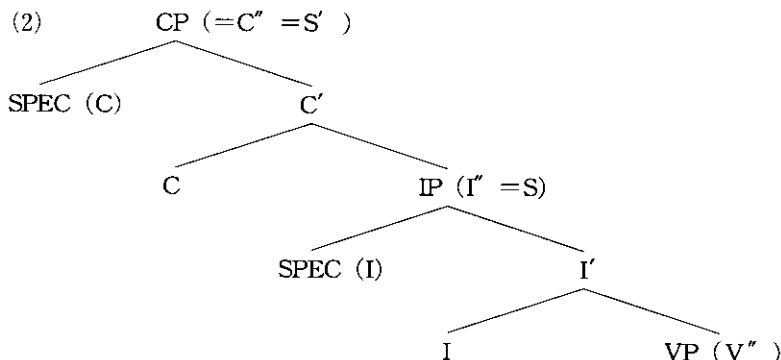
一般に $[\pm N, \pm V]$ なる素性に基づいて規定される範疇は語彙範疇 (lexical category) と呼ばれ、このような素性によって決定されない範疇は非語彙範疇 (nonlexical category) と呼ばれる。名詞 ($N [+N, -V]$)、動詞 ($V [-N, +V]$)、形容詞 ($A [+N, +V]$) と前置詞 ($P [-N, -V]$) は語彙範疇に属し、屈折 (Inflexion, I と略記)、補文標識 (Complementizer, C と略記) と指定辞 (Specifier, SPEC と略記¹⁾) が非語彙範疇に属する。Chomsky (1986) の X バー理論によると、任意の語彙範疇 X が与えられると、より上位の範疇 X' とさらに上位の最大範疇 (最大投射) X'' (XP) が得られる。このようにして、語彙範疇は順次より上位の範疇に投射されることになる。英語、スペイン語、フランス語等において、投射は基本的に、(1) の型式に従い、その出力として D 構造が得られる。²⁾

原稿受付：平成2年2月19日

*長岡技術科学大学語学センター

- (1) a. $X' = X \text{ XP}^*$
 b. $X'' = \text{XP}^* X'$

この投射プロセスは、(1)の型式が非語彙範疇(具体的にはIとC)にも拡張されると仮定することにより、 S' は基本的に、(2)のように展開される。³⁾



本来語彙範疇に対して適用可能な(1)の型式を非語彙範疇(IとC)とされる要素にも適用することは、IとCの持つ語彙性(lexicality)を物語るものと考えよう。⁴⁾Iの語彙性、つまりIがその同位要素(sister)を適正(語彙)統率をすると仮定した議論も可能となる。例えば、Zagona (1988)は英語に観察される動詞句削除(VP reduction)をこのIの適正統率に還元する。

- (3) Mary thought Tom would keep the promise, and *he did* [_{VP} e] ⁵⁾

動詞句削除が許されるのは、語彙的に実現されたI(上例では*did*、他の例として *modals* と *to infinitive* の *to* が考察されている)がVPを適正統率する場合であるという論を展開する(本稿では、助動詞 *do*、単純未来の *will* そして *to* が考察対象となる)。Zagona (1988)の論法によれば、語彙的に実現されたIが語彙(的)範疇と認定されることになる。本稿は、このIの語彙性と Chomsky (1986)の理論(以下で Barriers 理論と略記)が抱える問題点、特に VP 付加(VP adjunction)が提起するそれを考察し、VP 付加に代わる仕組みを提案する。

こう.

(5) a. 統率 (Government) の定義

α governs β iff

(i) α m-commands β , and

(ii) there is no γ , γ a barrier for β , such that γ excludes α .

b. m 統御 (m-command) の定義

α m-commands β iff α does not dominate β and every γ , maximal projection, that dominates α dominates β .

c. 支配 (Domination) の定義

α is dominated by β iff it is dominated by every segment of β .

d. 排除 (Exclusion) の定義

α excludes β iff no segment of α dominates β .

e. 障壁 (bar.) の定義

γ is a barrier for β iff (i) or (ii)

(i) γ immediately dominates δ , δ a BC for β ;

(ii) γ is a BC for β , $\gamma \neq \text{IP}$. ($\gamma, \beta = \text{maximal projection}$)

f. 阻止範疇 (Blocking Category, BC) の定義

γ is a BC for β iff γ is not L-marked and γ dominates β .

g. L-標示 (L-Marking) の定義

α L-marks β iff α is a lexical category that θ -governs β .

h. θ -統率 (θ -Government) の定義

α θ -governs β iff α is a zero-level category that θ -marks β , and α, β are sisters.

i. 空範疇原理 (Empty Category Principle, ECP) の定義

nonpronominal empty categories must be properly governed.

j. 適正統率 (Proper Government) の定義

α properly governs β iff α θ -governs or antecedent-governs β .

VP 付加がどのように機能するか具体的に検討するため、(6)について考えてみる。

- (6) a. how_i did you fix the car t_i
 b. [_{CP} how_i [_{IP} did you [_{VP} fix the car] t_i]]
 c. [_{CP} how_i [_{IP} did you [_{VP} fix the car t_i]]]
 d. [_{CP} how_i [_{IP} did you [_{VP} t_i ¹] [_{VP} fix the car t_i]]]
-

Barriers 理論は、(6a) に対して (6b, 6c) の構造を設定する。¹⁰⁾ 付加語 (adjunct) の痕跡は θ 統率されないため、ECP を満たすには先行詞統率される必要がある。(6b) の構造において、IP は C によって L 標示されないため bar. になる可能性があるが、(5e-ii) の定義よりその可能性はなくなる。先行詞 how_i と痕跡 t_i の間には bar. が介在しないため、 how_i は t_i を適正 (先行詞) 統率 (ECP を満足) し、また Subjacency (0-subjacent) をも満たす。一方、(6c) の構造では、I は語彙範疇でないためその同位要素 (sister) である VP を L 標示しない。この VP の bar. 性が直接上位の最大範疇である IP に受け継がれて、 how_i と t_i の間には複数の bar. (VP, IP) が介在することになる。すると、(6c) が誤って非文と予測される事態が生ずる。この事態を打開するため、Barriers 理論では how_i を VP に付加させることにより一時停止する位置を作り出す (6d)。より上位の VP は I にとって L 標示されないと考えられているため bar. となる可能性があるが、当該 VP は最大投射でなく、最大投射の一分枝にすぎないため bar. を構成せず (より下位の VP も同様に bar. を構成しない)、また直接上位の最大範疇にその bar. 性 (BC 性) を伝えることもない。(5e-ii) により、IP も bar. を形成しない。結果として、①、②の移動は、ECP を満足し、0-subjacent となり、当該文の文法性を適切に予測できることになる。前述のように、VP 付加を用いることにより、例文 (4) における全ての移動は ECP と Subjacency を同時に満足する。

Rizzi (1982) 以来、境界節点がパラメータ化されるのは周知の事実であ

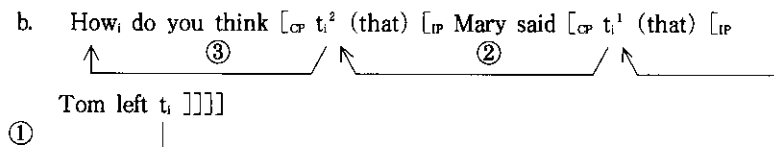
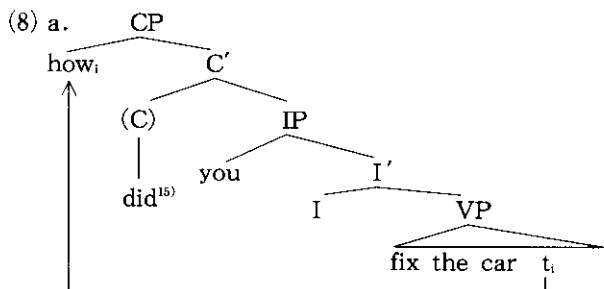
る。¹³⁾ (7b') の場合も、*t_i* に関する移動が2回の 1-subjacent、*t_i* の移動①、②は双方とも 0-subjacent となり、誤った予測をする。この不適切な予測は、VP 付加を用いることによると考えられる。

Barriers 理論では、付加操作が最大範疇の間で適用され、且つ付加を受ける最大範疇が非項(nonargument)に限定される。上述のように、I がその sister である VP を L 標示しないと仮定する Barriers 理論では VP 付加は必要となる。一方、VP と同様に非項として機能する、またそう機能し得る範疇(例えば、IP, PP) への付加は排除される。何故に非項である VP にのみ付加が許されるが明らかでない。また、VP 付加が適用された場合の形態論上の反映が皆無である(この点で、形態論上の反映が明瞭である話題化(Topicalization)の場合と異なる。本稿では、話題化のプロセスとその場合の I の L 標示機能については言及しない)。Torrego (1984) が指摘するように、スペイン語では非最大範疇である V の IP への付加操作の必然性が確認される。この点でも、Barriers 理論が設定する付加に関する仮定には問題があると言える(本稿の註(2)も参照されたい)。

2

境界節点に言及する Subjacency と bar. に基づく Subjacency による文法性予測が異なる場合がある。しかしながら、後者の Subjacency は前者のそれを一部改変・改良した理論と見なすことができる。つまり、両 Subjacency にはある程度の整合性・連続性が見いだされると考える。註(13)の仮説が仮に妥当するものと考え、イタリア語の境界範疇(bar.) が S' (CP) となることは、次のように説明される。当該言語においては、I がその sister である VP を常に L 標示することにより、直接上位の最大範疇 IP が bar. になることはない。IP の BC 性は、ある条件下で上位の最大範疇である CP に受け継がれ、その結果 CP が bar. を形成する。この点で、Rizzi (1982) の Subjacency 理論では註(13)の仮説による理論継承が認められる。¹⁴⁾ IP が境界節点が成すとされる英語の場合はどうだろうか。

VP 付加を用いる Barriers 理論では、IP はそれが支配する要素、例えば I, VP, CP の構造の如何を問わず、一般的に BC となるが bar. にはならない (cf. 定義 (5e-ii)). IP が bar. となるのは、IP に直接支配された要素の bar. 性 (BC 性) を受け継ぐ場合に限られるが、VP 付加はこの可能性を否定する。この点で、理論としての連続性が問題となる。当該連続性の回復には、構造情報だけでなく、実現情報をも勘案した Subjacency 理論の構築が必須であると思われる。そのためには、VP 付加を全廃する必要がある。以下に、実現情報をも射程内に置く理論の概略を述べる。英語における I はその sister である VP を L 標示しないので、VP は bar. となる。この VP の bar. 性が直接上位の最大範疇である IP に受け継がれ、IP も bar. となる。一方、I が語彙的に実現された場合には、I がその sister である VP を L 標示する (VP が L 標示する機能を持つ I を I^{lex} と呼ぶ)。以下で、この理論の中核をなす仮説群の設定にとりかかる。



仮説A: 母型節 (matrix CP と略記) において語彙的に実現された I は, その sister である VP を L 標示する.

仮説 A により, (8a) 中の I は語彙的に *did* と実現されているので, その sister である VP を L 標示する. よって, VP は *bar.* とならず, 直接上位

の最大範疇である IP も $\bar{bar}$. を形成しない。つまり、 t_i と how_i との間には $\bar{bar}$. が介在しない。それ故、付加語の痕跡である t_i は、適正（先行詞）統率され（→ ECP を満たす）、0-subjacent となる。一方、(8b) の移動①、②では I が語彙的に実現されていないため、VP と直接上位の IP が $\bar{bar}$. を形成する。よって、基底生成された位置にある t_i も、中間痕跡 t_i も適正（先行詞）統率されず ECP に抵触する。同時に、移動①、②は 2-subjacent となり、Subjacency にも違反する。そこで、仮説 A を以下のように改めることにする。

仮説 B : (a) 母型節 (matrix CP と略記) において語彙的に実現された I は、その sister である VP を L 標示する。

(b) matrix V が下位範疇化する有時制 CP の SPEC 位置が $[-Wh]$ 要素¹⁶⁾で満たされる場合に限り、matrix I^{lex} の機能が推移的により深く埋め込まれた (embedded, embd. と略記) 有時制 CP 中の I に受け継がれる (transitivity)。

仮説 B により、(8b) 中の痕跡は全て ECP を満足することになる。また、全ての移動は 0-subjacent となり、Subjacency を満たす。次に (9) について考える。

(9) a. I wonder [_{CP} how_i [_{IP} Tom danced t_i]]



b. *What_i did Tom complain [_{CP} t_i that [_{IP} Jane bought t_i]]?]



c. What_i did Tom say [_{CP} t_i (that) [_{IP} Jane bought t_i]]?]



V は、その下位範疇化する有時制 CP に関し、 $V^1 [+ \text{---} -Wh]$ 、 $V^2 [+ \text{---} \pm Wh]$ 、と $V^3 [+ \text{---} +Wh]$ に分類されるが、本稿では V^1 と V^2 をまとめて V^{-Wh} として、 V^3 を V^{+Wh} として取り扱う。仮説 B は、(9c) の文法性を適切に予測するが、(9a-b) に関しては不適切な文法性予測をする。つ

まり、(9a) と (9b) をそれぞれ非文、文法的と予測する。(9a) では *embd.* CP 中の *I* が語彙的に実現されず、*matrix I^{ex.}* の機能も受け継がれないため、その *sister* である VP を *L* 標示することはない。よって VP が *bar.* となる。付加語の痕跡 *t* は適正 (先行詞) 統率されず ECP に抵触し、当該文は不適切にも非文と予測される。*V^{+WH}* に属する動詞は、実際に運用される場合に否定、疑問要素を伴って出現するタイプと、それら要素の随伴を必須としないタイプに大別される。例えば、後者のタイプには例えば *wonder* が、前者のタイプには *matter* が属する。動詞 *matter* は、否定文、疑問文、条件文で用いられるのが通例である。¹⁷⁾ そこで、後者のタイプ *V^{+WH}* は潜在的に否定・疑問要素を内包すると考えることが可能となろう。つまり、*wonder* タイプの *V^{+WH}* は、*S* 構造において *I* がゼロ形態で実現されていると想定する (*I=I^{ex.}*)。¹⁸⁾ 更に、*V^{+WH}* の下位範疇化する有時制 CP 中の *SPEC (C)* に *[+Wh]* 要素が位置する場合に限り、*I^{ex.}* の性質が *embd.* CP の *I* に受け継がれると考える。*I^{ex.}* がより下位の CP 中にある *I* にその機能を伝えるのは、*matrix V^{-WH}* の下位範疇化する CP の *SPEC (C)* 位置に顕著的な、つまり痕跡でない *[-Wh]* 要素が実現されるか、*matrix V^{+WH}* の下位範疇化する CP の *SPEC (C)* 位置に顕著的な、痕跡でない *[+Wh]* 要素が実現される場合に限られることになる。この過程は、一種の照合 (*check process*) と同定できる (以下では、照合操作として言及される)。

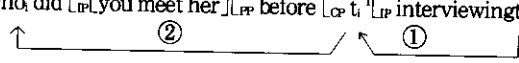
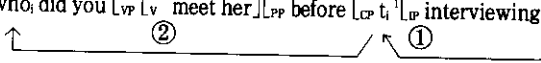
(9a) と (9c) の (中間) 痕跡は ECP, *Subjacency* の双方を満足することになる。(9b) は、(9c) に対する論法に従うと誤って文法的と予測されることになる。(9b) と (9c) 中の *matrix V* はそれぞれ非架橋動詞 (*Non-Bridge Verb*, *V^{-WH,NB}* と略記)、架橋動詞 (*Bridge Verb*, *V^{-WH,B}* と略記) に属する。非架橋動詞が *matrix CP* 中の *I^{ex.}* の機能をより下位にある *embd.* CP 中の *I* に伝達しないと仮定することにより、(9b) の非文性が予測可能となる。つまり、*t*₁ から *t*₁¹ への移動が 2-*subjacent* となり、*Subjacency* に接触する。これにより、仮説 B は以下のように書き換えられる。

仮説C : (a) matrix CPにおいて語彙的に実現されたIは、その sister である VP を L 標示する。

(b) 照合操作が成立する場合に限り、この I^{lex} の機能は matrix V の下位範疇化する有し制 CP 中の I に推移的に受け継がれる。但し、 $V^{-WH,NB}$ に関しては、 I^{lex} 機能伝達が阻止される。

3

以下で、仮説CとBarriers理論のそれぞれによる文法性予測を比較の観点から検討し、仮説Cを更に厳密な形で定式化する。最初に付加語の島 (adjunct island) からの項 (argument) の抽出について考える。

- (10) a. *who_i did you meet her before interviewing t_i
 b. who_i did [_{IP} [you meet her] [_{IP} before [_{CP} t_i [_{IP} interviewing t_i]]]]

 c. who_i did you [_{VP} [v' meet her] [_{PP} before [_{CP} t_i [_{IP} interviewing t_i]]]]


Barriers理論では、(10b)の構造が想定されている。¹⁹⁾ 項の痕跡 t_i は動詞 (interviewing) によって適正 (θ) 統率され、ECPを満足する。移動①は、VP付加により0-subjacentとなる。移動②は、PPがL標示されないためbar.となり、そのbar.性が上位の最大範疇IPに受け継がれる結果、2-subjacentとなりSubjacencyに抵触する。しかしながら、長谷川(1986)も指摘するように、PPはIPでなくVPに直接支配されていると考えるのがより妥当する。つまり、(10c)が正しい構造である。この場合、移動①が0-subjacent、移動②が、1-subjacent (PP=bar.)となる。結果として、VP付加を用いることにより(10a)は誤って文法的と予測される。一方、VP付加を援用しない仮説Cはどのような予測をするであろうか。照合操作が成立しないため、PPに支配されたCP中のIはそのsisterであるVPをL標示しない。移動①は、VPとIPのbar.の介在により2-subjacentと

なり、当該文の文法性判断(*)が適切に予測される。

- (11) a. *why_i do you believe [_{NP} the [_{N'} claim] [_{CP} t_i¹ that John [_{VP} left t_i]]]



- b. ?*what_i do you believe [_{NP} the [_{N'} claim] [_{CP} t_i¹ that John [_{VP} bought t_i]]]



(11) は Lasnik & Saito (1984) からのものである。彼らによると、(a) は Subjacency, ECP の双方に抗触し、(b) は Subjacency のみの違反となる。この場合も VP 付加を用いる Barriers 理論は両文の文法性の差異を説明できない。(a), (b) の双方に関し、移動①, ②は 0-subjacent となる。(b) の t_i は項の痕跡である V (*bought*) によって適正 (θ) 統率され、ECP を満足する。(a) の t_i は付加語の痕跡であるので、その中間痕跡もまた適正統率されなければならない。 δ が語彙的実現された C (*that*), あるいは δ が N (*claim*) とした場合の最小条件を適用すると、 t_i , t_i^1 の双方がそれぞれの先行詞によって適正統率されないことになる。²⁰⁾ その結果、(a) は非文、(b) は文法的と予測されることになる。これは、明らかに事実と反する。

仮説 C は上の文の文法性判断を適切に予測する。この場合、matrix V (*believe*) は NP を下位範疇化する。よって、照合操作は成立せず、matrix I^{ex} が embd.I に受け継がれることはない。(a) の移動①において、VP が bar. となり、その bar. 性が上位の IP に受け継がれる結果、ECP に抵触し 2-subjacent となる。(a) の移動②は双方の制約に違反しない。一方、(b) は ECP を満足するが、(a) と同様、移動①が 2-subjacent となり Subjacency に違反する。以下の (12b) もまた複合名詞句制約の事例である。

- (12) a. how_i did John want [_{CP} t_i¹ to [_{VP} fix the car t_i]]



- b. *how_i did John announce a plan [_{CP} t_i¹ to [_{VP} fix the car t_i]]



Barriers 理論は (a) の文法性を適切に予測する。仮説 C の予測もまた適

切なものである。embd. I は語彙的に実現 (*to*) されているので、その sister である VP を L 標示する。よって、*how* は適正 (先行詞) 統率され、移動①、②は 0-subjacent となる。一方、(b) は問題を提起する。Barriers 理論にせよ、仮説 C にせよ、移動①、②は双方とも 0-subjacent と予測される。すると、ECP 違反に還元せざるを得ない。*do* を N (*plan*) とした場合の最小条件により、N' が統率に対する bar. となり、適切に (b) の非文性が予測される。如何なる場合に、如何なる要因によって最小条件に適用が停止、あるいは発動するのであろうか。この問題の考察は、本稿 5 節において行われる。

- (13) a. **how*_i did you [_{v'} tel him [_{CP} when_j [_{IP} to [_{VP} fix it t_i t_j]]]]

 b. ?*what*_i do you wonder [_{CP} how_j [_{IP} to [_{VP} fix t_i t_j]]]
 c. **how*_i do you wonder [_{CP} what_j [_{IP} to [_{VP} fix t_j t_i]]]

Barriers 理論は、(13a) の文法性判断 (*) を ECP に還元する。移動①は ECP, Subjacency を満足する。一方、移動②においては、embd. IP の BC 性が上位の CP に受け継がれる。その結果、当該 CP が bar. となり、*how* は適正 (先行詞) 統率されない。1-subjacent の移動であるので Subjacency には抵触しない。(11) で観察した文法性判断を参照すると、当該文は Subjacency にも抵触すると考えた方がより妥当するであろう。[+Tense] の素性を有する matrix I^{lex}、照合操作によってその L 標示機能を受け継いだ [+Tense] embd. I と [-Tense] の素性を持つ I^{lex} (*to*) が異なる振る舞いを示すと考えるのは無理のあるものではない (Zagona (1988) にも、これと同趣の仮定が設定されている)。そこで、[-Tense] I^{lex} の機能は、単一の痕跡の同定に限定されると仮定することにする。ただし、照合操作の成立による [+Tense] I^{lex} はこの限りでない。前述のように、語彙的に実現された I^{lex} (*to*) は、照合操作の成立によって matrix I の L 標示機能を受け継いだものではない。この点で [-Tense] I^{lex} (*to*) は matrix I^{lex} から独立している。つまり、[-Tense] I^{lex} が生起する CP 内での bar. 性

受継ぎは当該節 (CP) 内に極限され、その上位にある最大範疇に受け継がれることはないと考えられる。その結果、仮説 C を以下のように書き換える必要がある。

仮説 D : (a) matrix CP において語彙的に実現された I (I^{lex}) は、その sister である VP を L 標示する。

(b) 照合操作が成立する場合に限り、この I^{lex} の機能は matrix V の下位範疇化する [+Tense] CP 中の I に推移的に受け継がれる。但し、V-WH,NBに関しては、 I^{lex} 機能伝達が阻止される。

(c) [-Tense] I^{lex} の機能の適用は単一の痕跡の同定に限定され、bar. 性の受け継ぎは当該 I^{lex} の生起する CP 内でのみ発動する。

(13a) において、移動①に I^{lex} (*to*) の機能を適用した場合、移動①は ECP と Subjacency (0-subjacent) を満足する。移動②は、embd.VP, embd. IP が bar. を形成することにより ECP と Subjacency に抵触する。移動②に I^{lex} 機能を適用した場合、移動②は embd. IP の BC 性が直接上位の CP に受け継がれるために ECP に違反し 1-subjacent となる。移動①は VP と IP が bar. を形成するため ECP に抵触し、2-subjacent となる。このように、仮説 D は (13a) の文法性判断を ECP, Subjacency の違反に還元する。(13b) において、 I^{lex} (*to*) の機能を t_i に適用した場合、 t_i に関する移動は ECP と Subjacency (0-subjacent) を満足する。 t_j に関する移動は、embd. VP, IP が bar. となるため ECP と Subjacency の双方に抵触する。 I^{lex} (*to*) の機能を t_i に適用した場合、 t_i の移動は ECP を満足するが、embd. VP, IP が bar. を形成するため Subjacency (2-subjacent) に違反する。 t_j に関する移動は ECP と Subjacency の双方を満足する。Stowell (1989) の指摘する優先派生 (preferred derivation) の原則に従い、[-Tense] I^{lex} (*to*) の機能は t_i に適用され、その結果 (13b) は Subjacency にのみ抵触することになる。(13c) において I^{lex} の機能が t_i に適用された

場合の t_i に関する移動は ECP と Subjacency を満足し、 t_i の場合は ECP を満たすが Subjacency に抵触する (2-subjacent)。当該機能を t_i に適用した場合には、 t_i の移動が ECP と Subjacency に違反する (embd. VP, IP が bar. を形成する)。 t_i に関する移動は ECP と Subjacency 双方のを満たす。優先派生の原則によれば、(13c) は Subjacency にのみ抵触することになる。これは事実と反する。(13b) と (13c) に対する文法性判断上の差異も説明できない。(13c) においては、 $[-\text{Tense}] I^{\text{ex}}$ の機能を t_i に適用する必要が生ずる。これは、 I^{ex} の機能が適用される痕跡は当該 I が生起する CP の SPEC (C) にある WH 要素のそれと規定することによって導かれる。すると仮説 D は以下のように修正される。

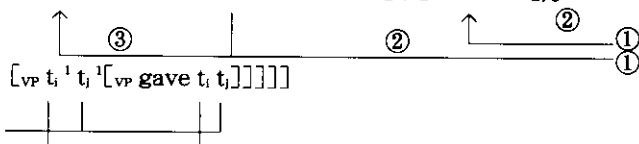
- 仮説 E : (a) matrix CP において語彙的に実現された I (I^{ex}) は、その sister である VP を L 標示する。
- (b) 照合操作が成立する場合に限り、この I^{ex} の機能は matrix V の下位範疇化する $[+\text{Tense}]$ CP 中の I に推移的に受け継がれる。但し、 $V^{-\text{WH,NB}}$ に関しては、 I^{ex} 機能伝達が阻止される。
- (c) $[-\text{Tense}] I^{\text{ex}}$ の機能の適用は、それが生起する CP の SPEC (C) にある WH 要素に対する痕跡の同定に限定され、bar. 性の受け継ぎは当該 I^{ex} の生起する CP 内でのみ発動する (当該 CP は bar. とならない)。

(14) a. ?what did you wonder to whom John gave.²¹⁾

b. $\text{what}_i \text{ did you wonder } [_{\text{CP}} [\text{to whom}]_j \text{ John gave } t_i t_j]$

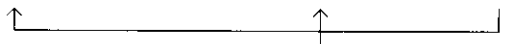


c. $\text{what}_i \text{ did you } [_{\text{VP}} t_i {}^2 [_{\text{VP}} \text{wonder} [_{\text{CP}} [\text{to whom}]_j \text{ John}$



基底生成された位置にある項痕跡 t_i は V (*gave*) によって適正 (θ) 統率される ($\rightarrow$ ECP を満足). Barriers 理論の予測するところでは (14c), t_i に関する移動①②, t_i の①③は 0-subjacent となる. しかし, t_i に関する移動②は, embd. IP の BC 性が上位の最大範疇 CP に受け継がれる (その結果, CP が bar.) ことにより, 1-subjacent となる. 仮説 E ではどのように予測されるであろうか. (14b) の matrix V (*wonder*) は V^{+WH} であり, それが下位範疇化する CP の SPEC (C) の位置に [+Wh] 要素が実現されているため, 照合操作が成立する. よって, matrix I^{lex} の持つ L 標示機能は embd. I に受け継がれる. すると, t_i に関する移動は 0-subjacent, t_i のそれは embd. IP の BC 性が上位の CP, VP, IP に受け継がれることにより 3-subjacent となる.

(15) ?what_i did you wonder [_{CP} [to whom]_j] to give t_i t_j



基底生成された位置にある項痕跡 t_i は V (*give*) によって適正 (θ) 統率される ($\rightarrow$ ECP を満足). embd. I は語彙的に実現されているので, その sister を L 標示する (仮説 E により, この機能は単一の痕跡, t_i の同定に限定される). I^{lex} の L 標示機能を t_i に適用した結果, 当該痕跡移動は 0-subjacent, t_i に関する移動が 2-subjacent となる. つまり, 仮説 E によれば, (14) と (15) は同程度に非文ということになる.²²⁾

Chomsky (1986, p.37) は, 多くの母国語話者にとって (14) の認容度が (15) に比べて低いと指摘する. そして, この認容度低下を extra bar. に還元する. 最も深く埋め込まれた有時制 IP が WH 移動に限定された bar. を形成すると考える. 更に, 当該 IP の bar. 性は, 上位の最大範疇に受け継がれることはない想定する. 言うまでもなく, この議論は Barriers 理論の枠組みを越えた *ad hoc* なものである. 当該 extra bar. を想定する理由は他にもある. 例えば, 以下の (16) について考えてみよう.

(16) * [which car]_i does [_{IP} John wonder [_{CP} whether [_{IP} Mary fixed t_i]]]

VP 付加を用いる Barriers 理論は *n* に関する移動を 1-subjacent (CP が bar.) と予測する。つまり、(16) が誤って文法的と予測される。この不都合を打開するため、上の議論が必要となる。IP と CP が bar. となり、当該文は Subjacency (2-subjacent) に抵触するということになる。仮説 E は、(16) の文法性に関する判断を適切に予測する。照合操作の成立により、embd. I は I^{lex} となり、その sister である VP を L 標示する (VP=bar.)

しかしながら, embd. IP が BC となるため, その直接上位にある embd. CP, matrix VP, IP が順次 bar. を形成する。3-subjacent となるため, 当該文は適切に非文と予測される。その結果, extra bar. を想定する必要性はなくなる。次に, NP 内部からの WH 移動 ((17)) と複合名詞句制約 ((19)) について考える (紙面の都合上, 関係節については省略する)。

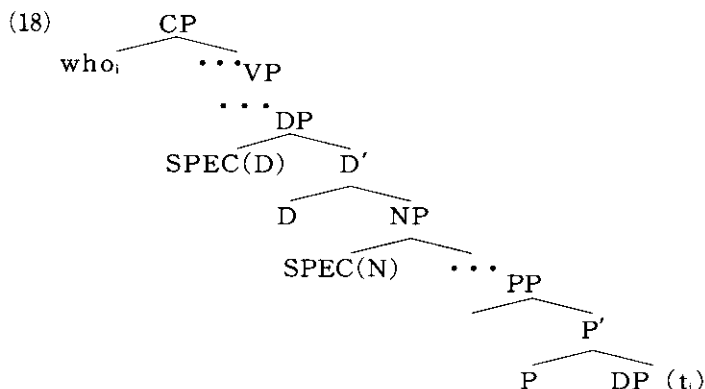
4

- (17) a. who_i did you see *a* picture of t_i
 b. ?(*) who_i did you see *the* picture of t_i
 c. * who_i did you see *John's* picture of t_i
 d. * who_i did you see *that* picture of t_i
 e. * what_i was an/the article about t_i criticized in the
 journal²³⁾

(17a-d)に観察される文法性の相違は、境界節点に言及する Subjacency によっても、Barriers 理論によっても説明され得ない。この場合もまた、Barriers 理論は extra bar.に訴えることになる。N (picture) がその sister である要素に斜格 (Oblique Case) を付与し、当該要素が bar. を形成すると考える。この場合もまた、当該要素の bar. 性は上位の最大投射に受け継がれない。その結果、(17a-b) は全て 1-subjacent となる。仮説 E もまた、当該文全てを文法的と予測する (0-subjacent) ((17e) は Barriers 理論、境界節点に言及する Subjacency 理論の双方によって非文と予測される)。

従来 referential NP と分析されていた要素を DP, つまり DET の最大

投射と見なすことにする。すると、基底生成された位置にある痕跡が一举に matrix CP の SPEC 位置に移動する必要がなくなり、SPEC (D)、あるいは SPEC (N) の位置に一時停止可能となる (SPEC (N) から SPEC (D) への移動も可能である)。



ここで、以下の仮説を設定する。

仮説 β : D はその sister である NP を L 標示しない、また D に生起する [+Definite] 要素は、より下位に位置する主要部の L 標示機能を逆転させる。²⁴⁾

DET が *a* の場合…… t_i から SPEC (N) への移動は 0-subjacent、SPEC (N) から SPEC (D) への移動は 1-subjacent となる (D がその sister を L 標示しない)。最終着地点への移動は 0-subjacent となる。

DET が *the* の場合… L 標示機能逆転により、N はその sister である PP を L 標示しない (PP=bar.) ため、 t_i から SPEC (N) への移動は 1-subjacent となる。SPEC (N) から SPEC (D) への移動は 1-subjacent である。最終着地点への移動は 0-subjacent となる。

よって、仮説 β は (17a-b) の文法性を適切に予測する。Stowell (1989) と同様に、動作主句は SPEC (N) に、所有句は SPEC (D) にあるとする。この場合、D の位置には *the* が生起すると仮定する (PF 部門において削除される)。

John's が動作主の場合…L 標示機能逆転により、 t_i から SPEC (D) への移動では PP と NP が bar. となる (2-subjacent)。他の移動は 0-subjacent。

John's が所有者の場合…L 標示機能逆転により、 t_i から SPEC (N) への移動では PP が bar. となる (1-subjacent)。他の移動では D の sister である NP, DP, matrix VP, IP が bar. となる。

(17d) の *that* は D の位置にあるのではなく、SPEC (D) にあり、D の位置には *the* があると仮定する (PF 部門において削除される) ことにより、所有属格句の場合と同じ結果となる。つまり、本稿の仮説は *John's* が動作主である解釈の方がより認容度が高くなると予測する。²⁵⁾ (17e) は主語条件 (Subject Condition) の例である。SPEC (I) の位置には DP が生起し、bar. を構成すると考えられる。D = *a* の場合、 t_i から SPEC (N) への移動は 0-subjacent、SPEC (N) から SPEC (D) への移動は 1-subjacent、SPEC (D) から母型節 SPEC (C) へのそれは 2-subjacent となる。D = *the* の場合、 t_i から SPEC (N) への移動は L 標示機能逆転により 1-subjacent、SPEC (N) から SPEC (D) への移動は 1-subjacent、最終着地点までのそれは 2-subjacent となる。何れの場合も Subjacency に抵触することになる。

(19) a. ? [which book]₁ did John hear [DP [D' a [NP t_i ² rumor] [CP t_i ¹ that Tom stole t_i]]]²⁶⁾

b. * [which book]₁ did John believe [DP [D' the [NP t_i ² rumor] [CPT₁¹ that Tom stole t_i]]]

明らかに、照合操作は成立しない。embd. I はその sister である VP を L

標示せず、VP が *bar.* を形成する。VP の *bar.* 性は直接上位の最大範疇 IP に受け継がれ、 t_i から t_i^1 への移動は (a), (b) 共 2-subjacent となる。D = *a* の場合、 t_i^1 から t_i^2 への移動は 0-subjacent となり、D = *the* の場合は、L 標示機能逆転によって 1-subjacent となる。 t_i^2 から SPEC (D) への移動は双方共 1-subjacent となる。他の移動は 0-subjacent となる。つまり、(19a) が 2-subjacent, 1-subjacent, (19b) が 2-subjacent, 1-subjacent (2 回) となる。文法性判断に 1-subjacent 以上の移動が **visible** であり、それが累積的 (cumulative) に作用すると仮定するば、上の (a), (b) の差異が説明されることになる。²⁷⁾

5

前述ごとく、最小条件 (Minimality Condition) によって規定される *bar.* は X' レベルそのものであり、且つ統率にのみ適用される。この点で、最小条件による *bar.* は、統率と移動を同一の *bar.* 概念によって処理しようとする Barriers 理論にとって特異な性格を有するものである。理論としての一貫性を追求するならば、当該最小条件の適用を極力制限するか、あるいはそれを全廃する方向が望ましいであろう。以下では、当該最小条件の適用範囲を特定する (以下の議論は、LF 移動については言及しない)。

(20) a. *how_i did you fix the car t_i yesterday* (本稿の (12a))

b. *how_i do you [_{VP} t_i² [_{VP} want [_{CP} t_i¹ [_{IP} PRO to fix the car t_i]]]]]*

c. *who_i do you think [_{CPT_i}¹ (that) [_{IP} Tom saw t_i yesterday]]]*

d. *who_i do you think [_{CPT_i}¹ (* that) [_{IP} t_i left early]]]*

e. *why_i do you think [_{CPT_i}¹ (that) [_{IP} Tom left early t_i]]]*

前述のように、Barriers 理論は (20a) の文法性を VP 付加によって説明する。仮に $\delta = I$ とする最小条件を適用すると、(I' が *bar.* となり) 誤って当該文を非文と予測する (ECP に抵触する)。つまり、 $\delta = I$ とする最小条件は適用されないと指定する必要が生ずる (cf. Chomsky (1986) p.48)。

しかし、VP 付加を全廃する本稿の仮説 E はその指定を不要にする。同様に、VP 付加を用いる Barriers 理論は (20b) を非文と予測することになる。 $\delta=V$ とする最小条件の適用により、 t^2 は t^1 を適正 (先行詞) 統率しない (ECP に抵触する)。つまり、Barriers 理論は $\delta=V$ に対する最小条件の適用を阻止する指定を必要とする。この場合もまた、仮説 E ではそのような特別な指定が不要である。

適正統率を先行詞統率に一元化した場合には不都合が生ずる。(20c-e) において、C (*that*) が生起しない場合には $\delta=C$ の最小条件が適用されない (その場合、(20c-e) はすべて文法的と予測される)。C (*that*) が生起する場合には不都合が生ずる。中間痕跡 t^1 は基底生成された位置にある痕跡 t_i を先行詞統率する必要がある。一律に $\delta=C$ の最小条件が適用されると、基底生成された位置にある痕跡 t_i は適正 (先行詞) 統率されない。その結果、当該文はすべて非文と予測されることになる。明らかに、これは事実 に反する。つまり、内項の痕跡の事例で (20c) と付加語の痕跡の事例である (20e) では $\delta=C$ の最小条件適用を阻止し、外項の痕跡の事例である (20d) ではその適用を必須とするとの規定をもうける必要がある。しかしながら、この規定には重大な問題がある。最小条件の適用に関し、内項と付加語が同じ類に属することになる。一般的に subject-object asymmetry の形で言及されるように、その構造位置 (特に、付加語 *why* は外項と同位の位置を占める) により、外項と付加語が同じ類に属すると考えられる。つまり、内項と付加語が自然な類を形成すると考えることには重大な問題がある。このように、適正統率の先行詞統率への一元化は重大な問題を提起する。本稿では、従来通りの選言的な ECP 定義 (disjunctive definition) が採用される。よって、(20c) の内項 (internal argument) t_i は既に適正 (θ) 統率されるため、最小条件が関与しないことになる。²⁸⁾ 非項の痕跡の事例である (20e) では、当該条件の適用を阻止する必要がある。とすると、 $\delta=C$ の場合、最小条件が適用されるのは外項 (external argument) に限定されることになる (換言すれば、 $\delta=C$ に関する最小条件が適用されるのは C

が語彙的に実現され、同時に当該痕跡がCに隣接する場合に限られることになる)。

$\delta=N$ の場合について考える。既に検討したように、仮説Eは(12b)を0-subjacentと予測する。よって、当該文の文法性判断(*)をECPに還元せざるを得ない。便宜上(12b)を(21a)として再掲する。²⁹⁾

(21) a. * how_i did John announce [_{DP} t_i³ a [_{NP} t_i² plan [_{CP} t_i¹ to [_{VP} fix the car t_i]]]]]

b. * how_i did you believe [_{DP} t_i³ the [_{NP} t_i² rumor [_{CP} t_i¹ (that) [_{IP} he [_{VP} stole the book t_i]]]]]]]

Chomsky (1986:43) は (21a) の非文性を $\delta=N$ (*plan*) とする最小条件の適用によって説明する。(21a) と (21b) は殆ど同じ構造情報をもたらすが、それぞれの実現情報は異なる。(21a) では、embd. I が語彙的に実現されている。よって、 t_i から t_i^1 , t_i^1 から t_i^2 への移動は ECP と Subjacency の双方を満足する。しかし、 t_i^2 から t_i^3 への移動では NP が bar. を形成するため ECP に抵触する (D はその sister である NP を L 標示しない)。(21b) は t_i から t_i^1 への移動において ECP に抵触する。つまり、(21) では、また一般的に $\delta=N$ に対する最小条件を適用する必要がない。結果として、最小条件の適用は $\delta=C$ の場合に限定されることになる ((20d))。また、(20d) は、ある特定の条件下で embd. IP が bar. を形成するという仮定によって排除され得る。例えば、基底生成された位置にある t_i が意味的に空な Complementizer *that* と隣接している場合には当該痕跡を直接支配する最大範疇 (IP) が bar. を形成すると仮定される。しかしながら、この仮定が発動するのは (20d) のような * [*that-t*] effect の場合のみである。つまり、この仮定は一般性に欠ける。当該仮定の一部を成す隣接条件 (Adjacency) は、格付与の場合のように一般性を有する。しかしながら、隣接条件が発動するのは格付与の場合だけでない。石岡 (1990c) は、フランス語、スペイン語に観察される所有接語 (*su*) の振る舞いと NP 内部からの WH 要素移動を θ 階層における隣接条件によって説明している (こ

ここでは、所有接語について言及する)。(22)について考えてみよう ([] はスペイン語に関する石岡 (1990c) の調査結果, [] は Milner (1982) によるフランス語での振る舞いを示す)。

(22) El coleccionista posee el retrato de Felipe IV pintado por Velázquez.

あの収集家はベスケラ作のフェリー4世の肖像を所有している。

a. [* (??)] [*]

su retrato del coleccionista (su=de Velázquez)

b. [] []

su retrato de Felipe IV (su=de Velázquez)

c. [* (??)] []

su retrato de Velázquez (su=del coleccionista)

d. [] []

su retrato de Felipe IV (su=del coleccionista)

e. [] [*]

su retrato del coleccionista (su=de Felipe IV)

f. [* (??)] [*]

su retrato de Velázquez (su=de Felipe IV)

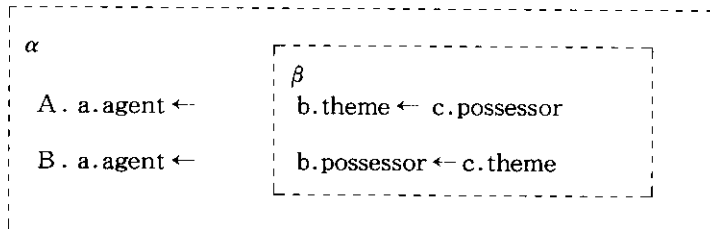
フランス語における所有接語の振る舞いは、純粋に相対的であり隣接性を要求しない θ 階層 (23a) によって説明可能である。所有接語として生起する要素がもう一方の要素よりも相対的により高位にある用例 (22b-d) は文法的、そうでない例文 (22a, e-f) は非文となる。しかしながら、この θ 階層 (23a) はスペイン語の事例を説明し得ない。(22d-e) は、所有接語が主題であり *de* で導入される要素が所有者の用例であるが、双方とも文法的となっている。スペイン語の事例は複合 θ 階層 (23b) によって説明可能である。フランス語とは異なり、スペイン語では、a.agent $\leftarrow$ b.theme なる θ 階層以外は隣接性が要求される。スペイン語には2つの θ 階層 α, β が存在する。 θ 階層 α の B.において、動作主 (agent) と所有者は隣接す

る。しかし、 θ 階層 α の A. では隣接しないため、動作主 $\leftarrow$ 所有者の θ 階層は設定され得ないことになる。このように、隣接性はスペイン語の所有接語の振る舞いを説明する。

(23) a. θ 階層 (フランス語)

a.possessor (source) $\leftarrow$ b.agent $\leftarrow$ c.theme

b. θ 階層 (スペイン語)



次に、(24) における助動詞の振る舞いに留意されたい。

(24) a. $\text{who}_i \text{ } t_i \text{ left}$

b. * $\text{who}_i \text{ did } t_i \text{ leave}$

c. $\text{who}_i \text{ did you see } t_i \text{ there}$

d. $\text{who}_i \text{ will } t_i \text{ leave}$

e. $\text{who}_i \text{ will you see } t_i \text{ there}$

f. Tom left

will とは異なり、助動詞 *do* は基底生成された位置にある痕跡 t_i との隣接を許さない。この点で、助動詞 *do* は Complementizer *that* に類似する。*do* と *that* は、同じ文脈、あるいは他の文脈でゼロ実現される可能性を有する点で似ているのである。

少なくとも WH 移動に関して、単一の適用事象に対する条件設定は不自然である。つまり、 $\delta = C$ の場合における最小条件適用の効果を定義体系の修正に求めるべきであろう。具体的には、bar. の定義を修正することによって派生させる方がより妥当するであろう。Barriers 理論と異なり、IP が特定の文脈で障壁 (bar.) を形成するという仮定により、障壁の定義 (5e) は (25e) のように修正される。

(25) e. 障壁 (bar.) の定義 (parameter = $\pm(b)$)

γ is a barrier for β iff (i) or (ii)

(i) γ immediately dominates δ , δ a BC for β ;

(ii) γ is a BC for β , ($\gamma \neq \text{IP}$ on the condition that a trace t in a base-generated position and a lexically realized category (C or I) (a) *with no lexical meaning* (b) *which has the possibility of zero-realization in the same or other contexts* are not adjacent).

(γ, β, δ = maximal projections)

(25e) の障壁定義は, (26) の Complementizer *for* の場合をも説明できる (* [for-to] Filter) (以下の例は Culicover and Wilkins (1984) による).

(26) a. * who_i is it annoying to you for t_i to watch TV

b. * who_i is it annoying for parents for t_i to watch TV

同様に, (25e) は (27) におけるドイツ語, フランス語の [*that-t*] 事象を説明する. 言うまでもなく, *pro-drop* 言語であるスペイン語, イタリア語では * [*that-t*] *effect* は発動しない (embd. SPEC (I) には *pro* が生起する). (27a-b) で観察されるように, オランダ語, フランス語とは異なりドイツ語では Complementizer *daß* はゼロ実現の可能性を有する. しかし, オランダ語では問題が生ずる (障壁の定義 (25e) はオランダ語の例 (27e) を非文と予測する).³⁰⁾

(27) a. Hans sagte, daß er Maria geküßt habe.

b. Hans sagte, er habe Maria geküßt.

c. * wer_i glaubst du [_{CP} t_i¹ daß [_{IP} t_i ihn gesehen hat]]

d. * qui_i penses-tu [_{CP} t_i¹ que [_{IP} t_i l'a vu]]

e. wie_i denk je [_{CP} t_i¹ dat [_{IP} t_i hem gezien heeft]]

'who do you think saw him?'

以上において, 主として英語における VP 付加代替操作の特定を試みた.

この操作は、構造情報だけでなく実現情報をも射程内に置く操作であった。本稿の仮説群に基づくこの代替操作により、Barriers理論よりもより適切な文法性判断予測が為され、当該理論の内包する問題点が解消されることになる。VP 付加を全廃した結果、「排除」概念が *bar.* の定義には関与しないことになる。更に、*extra bar.*、最小条件を設定する必要もなくなる。

当該代替操作が S 構造までに適用される移動に限定すべきか、あるいは LF 移動にも拡張すべきかが今後の研究テーマとなる。当然のことながら、後者の場合には本稿の仮説群を修正する必要があるであろう。³¹⁾

註

- 1) 限定辞 (Determiner, DET, あるいは D と略記) も含まれる。
- 2) (a) の X は X^0 , XP^* はゼロを含む任意数の最大投射連続, (b) の XP^* は X (あるいは X') の指定辞 (SPEC (X)) を表す。本稿では、バーの代わりにプライムを用い、最大投射 X'' は XP の形で表記される。(1) の形での X バー理論は種々の問題を提起する。まず第一に D 構造での付加構造を許容しない。例えば、Aoun (1986, p.73) に見られるように限定用法の関係節は (i) と分析されるが、この構造は当該 X バー理論、そして少なくとも D 構造においては最大投射への付加を認めない立場からも決して生成されない。

(i) $[_{NP} [_{NP}] [_{CP}]]$

Hernanz & Brucart (1987) が主張するように、(i) の構造に対応するのは非限定用法の関係節である(筆者は非限定用法の関係節構造を D 構造で生成するのではなく、移動変形によって S 構造で生成すべきものと考え、これに関する詳細な検討は他の機会にゆずる)。McCawley (1988) の指摘にもあるように、限定用法の関係節は (ii) と分析すべきである。

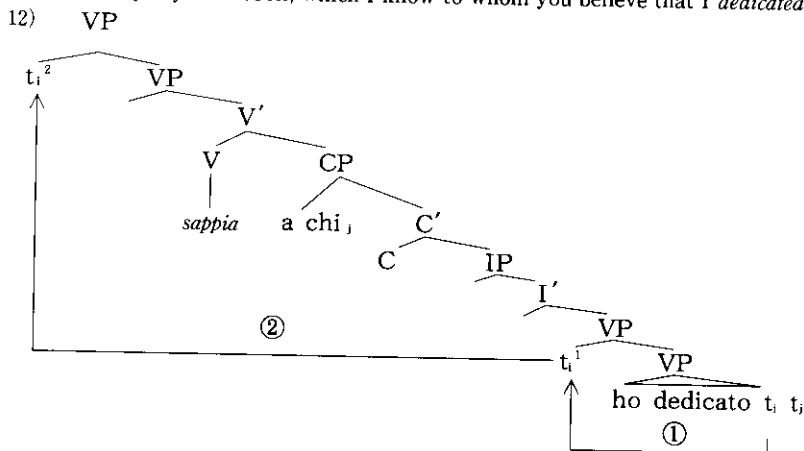
(ii) $[_{NP} [_{N'} [_{N'}] [_{CP}]]]$

つまり、D 構造では X' レベルへの付加構造のみを許容すべきだと考える。よって Chomsky (86) の X バー理論の (1a) は少なくとも (iii) のように改変すべきであろう。

(iii) $X' = X''$ の XP^*

- 3) (1) 図式を非語彙範疇とされる C と I だけでなく DET にも適用する可能性も考えられよう。つまり、(referential NP) に関して従来 NP と見なされてきた範疇を DET の最大投射と考えることも可能であろう (cf. Stowell (1989), Brame (1982), Fukui & Speas (1985))。本稿でもこの可能性が追求される。
- 4) Chomsky (1986) では、語彙範疇と非語彙範疇とが峻別されている。尚、範疇 C の語彙性は本稿の考察対象から除く。
- 5) Brucart (1987) では、*e* ではなく *pro* と規定される。
- 6) 最小条件 (Minimality Condition) によって規定される。*bar.* は統率のみに作用する。

- 7) ここでは (4) の文法判断を * としておく。
- 8) Barriers 理論はこの不備を特別な仮定によって切り抜けようとする。S₂' が特別な bar. を形成し、しかもこの bar. 性が直接上位の最大投射に受け継がれないと仮定する (よって、Barriers 理論によれば (4) は 1-subjacent となり、その文法判断は ? となる)。しかしながら、この仮定は後述する bar. 定義から全くはみでたものであり、*ad hoc* な性格のものであろう。
- 9) θ 統率は、従来の語彙統率に対応する。 θ 統率と先行詞統率は共に (5a) の統率定義に従う。最小条件 (Minimality Condition) は以下のように定義される。下記の Z は最大投射に限定されず、X' も含まれる。Chomsky (1986) は、Z を X' に限定した Narrower Minimality Condition を採用する。
- (5) k. 最小条件の定義
- in the configuration ... α ... [z ... δ ... β ...]
- z is a barrier for β if z is the immediate projection of δ , a zero-level category distinct from β .
- 斜字体部分は、*a lexically realized zero-level category* と修正すべきである。前述のように、最小条件による bar. は統率に対するそれである。当然のことながら、 δ の選択は限定される必要がある。例えば、 $\delta = I$ とすると、ECP に抵触するため付加語 (adjunct) の抽出移動が一般的に阻止される。Barriers 理論では δ が N と C (具体的には *that*) に関して言及されている。
- 10) 少なくとも英語においては (6c) の構造が妥当すると考える。以下の議論では (6b) の構造は取り扱わない。
- 11) 以下の英語への逐語訳を表す。斜字体部分は接続法形態の動詞を表す。
- (7') a. my first book, which I believe that you know to whom I dedicated...
- b. my first book, which I know to whom you believe that I dedicated...



移動①において、VP は bar. にならない (cf. (5a), (5d)). 移動②において、VP は t_i を支配していないので、当該 t_i に対する bar. とならない。IP が BC となり、直接上位の最大範疇である CP が bar. を形成する。移動②では、VP の一分岐節点を通過するが VP 節点全体は越していないため CP の bar. 性が受け継がれないと考え

る。

Barriers 理論によるこの説明には問題がある。4_iに関する移動で VP 付加が適用され、また 4_i 移動①で更に同一の VP に付加の適用を認めなければならない。同一の VP に対する二重付加は如何なる構造を生成するのか。これは重大な問題を提起するであろう。

- 13) ここで、(7) の文法性判断を説明する一つの可能性について言及する。イタリア語に関して以下が仮定される (用例はすべて Rizzi (1982) による。)

仮説 α:

(a) I はその sister である VP を L 標示する。

(b) IP が接続法節にある場合のみ、IP の BC 性、あるいはその bar. 性が上位の最大範疇である CP に受け継がれる (CP が bar. になる)。

(c) 同一の SPEC 位置には、単一の WH 要素が一時停止可能である。

(7a) の移動はすべて 0-subjacent となる。(7b) では、4_i に関する移動が 3-subjacent、(7b') では、4_i に関する移動が 6-subjacent となる。

以下の (iii), (iv), (v) について考える (これらの例は、全て Rizzi (1982) から引用)。

(iii) a. non so proprio chi_i t_i possa avere indovinato [a chi]_j affiderò questo incarico t_j

b. * questo incarico_i, che_i non so proprio chi_j t_j possa avere indovinato [a chi]_k affiderò t_i t_k...

(iv) a. questo autore_i, [di cui]_j non ricordo chi_j t_j mi abbia parlato t_i per la prima volta,...

b. * questo autore_i, [di cui]_j non ricordo chi_j t_j mi abbia mostrato il primo libro t_i,...

c. questo autore_i, [di cui]_j ricordo [CP t_j¹ che mi hai mostrato il primo libro t_i],...

(v) a. questo autore_i, [di cui]_j so [CP t_j¹ che il primo libro t_i è stato pubblicato recentemente],...

b. * questo autore_i, [di cui]_j non so quando_j il primo libro t_i sia stato pubblicato t_j recentemente],...

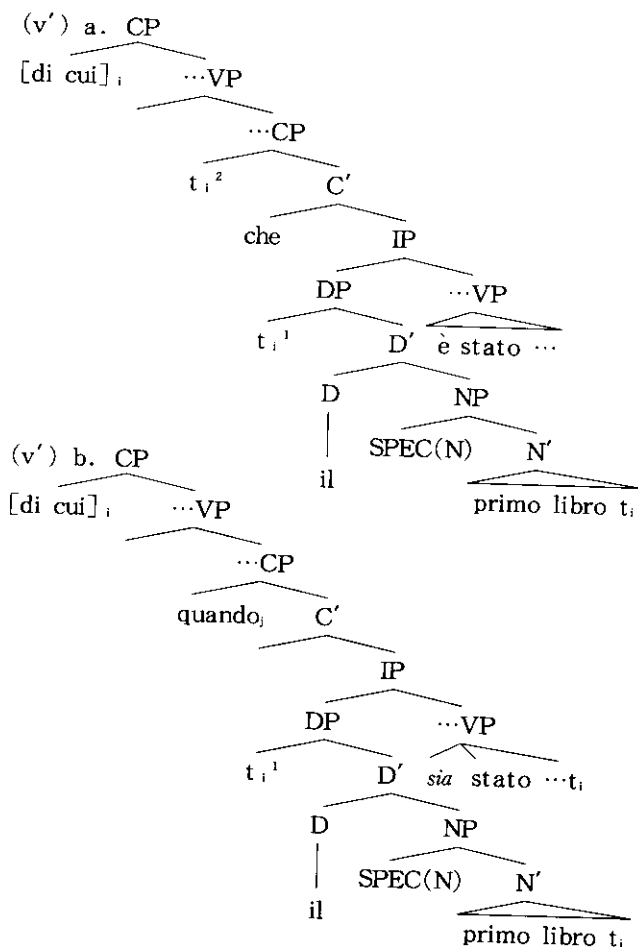
(iii) において、痕跡 4_i と 4_j は適性統率される。Subjacency に関し、(a) の 4_i と 4_j, (b) の 4_i と 4_j に関する移動は全て 0-subjacent となる。(b) の 4_i に関する移動のみが 3-subjacent となる。(v) に対しては、以下の (v') を想定する (簡略標示であることに留意されたい)。

Rizzi (1982: 51) が指摘するように、イタリア語では複合名詞句制約が厳密に発動する。以下の (vi) を非文として排除するには、D がその sister である NP を L 標示しない前提する必要がある (NP=bar.)。同時に、英語の場合と異なり、WH 要素の SPEC (N), SPEC (D) への一時停止が不可と考えなければならない。

(vi) * questo incarico_i, che_i non sapevo la novità [CP t_j¹ che avrebbero affidato t_i a te], ...

'this task, that I didn't know the news that they would entrust to you,...

D の sister である NP, その上位にある DP が bar. を形成し、Subjacency に違反することになる (t_i は ECP を満足する)。しかしながら、この前提は (va) と以下の (vii) を誤って非文 (*) と予測する。



(vii) a. Gianni_i, [di cui]_i immagino [_{CP} t_{i^1} che tu *abbia* visto la foto t_i sul giornale],...

'Gianni, of whom I imagine that you have seen the picture on the newspaper,...'

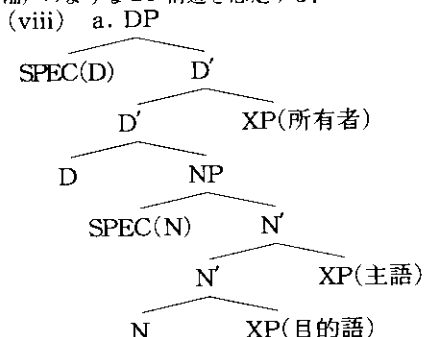
b. Gianni_i, [di cui]_i so [_{CP} t_{i^1} che una foto t_i è apparsa recentemente sul "Gazzettino"],...

'Gianni, of whom I know that a picture appeared recently in "Gazzettino",...'

(va) は, DP (*il libro*) の主語である WH 要素が文主語内部から移動する例である。 t_i は適正 (θ) 統率されない。結果, 当該痕跡, その中間痕跡は適正 (先行詞)

統率されなければならない。この場合、SPEC (N), SPEC (D) に一時停止が不可と仮定すると、NP, DP が bar. となる (DP は I' の sister であるため、本来の bar. を形成する)。よって、*ti* は ECP, Subjacency に抵触することになる。(vii a) は、DP (*la foto*) の主語、あるいは目的語である WH 要素が V (*abbia visto*) の目的語内部から、(vii b) は当該 WH 要素が文の主語内部から移動する例である。

本稿では、(viii) のような DP 構造を想定する。



Cinque (1980) が指摘するように、単独の WH 要素は DP 内部から移動可能である。つまり、この場合には D がその sister である NP を L 標示すると前提しなければならない。結果、移動する WH 要素が DP 内の D', N' に直接支配される位置に基底生成された場合に限り、当該 D はその sister である NP を L 標示すると考えなければならない (更に、この場合に限り、移動要素よりも上位にある SPEC (N) と SPEC (D) の双方に一時停止可能と前提する)。これらの前提にも関わらず、文の主語内からの WH 移動は非文と予測される。つまり、英語と異なり一般的にイタリア語では主語条件が発動しないと前提する必要がある。

移動する要素が最大範疇を飛び越える方向は二通りある。移動要素が最大範疇の直接支配する左分枝、或いは右分枝を経由する場合である (前者を (ノ), 後者を (ヘ) と表記する。この飛び越しの方向性は統率の方向性と異なる概念である)。つまり、イタリア語では (少なくとも DP に関し) 最大範疇 XP (ノ) は bar. を形成しない (パラメータ)。これらの前提は (v), (vi), (vii a-b) の文法性を適切に予測する。

しかし、これまで設定された仮説群は以下の例の相違を説明できない。

- (ix) a. Gianni, [di cui]_i immagino [_{CP} [in che occasione]_j ti *abbiano* parlato t_i t_j], ...
 'Gianni, of whom I imagine in which occasion they talked to you, ...'
 b. Gianni, [di cui]_i immagino [_{CP} [in che occasione]_j tu *abbia* visto la foto t_i t_j], ...
 'Gianni, of whom I imagine in which occasion you have seen the picture, ...'
 c. chi_i ti domandi chi_j t_j ha incontrato t_i (Adams (1984) による)
 'whom do you wonder who met'

上の仮説群は (ix a-b) の [di cui] の移動を 3-subjacent と予測し、(ix a-b) は双方とも非文と予測される。(ix c) の *ti* と *chi* は、ECP, Subjacency の双方を満足するため、当該文は文法的と予測される。この不都合は、複合 WH 移動の始発移動経路

を勘案することによって打開されると考えられる（包含関係、部分的共通関係に関しては註(22)、(30)も参照されたい）。ここで、WH要素の統語移動（S移動）に関して、以下の仮説を設定する。

仮説 α' :

- (a) IはそのsisterであるVPをL標示する。
- (b) 接続法節にあるIPのBC性、あるいはそのbar.性は、上位の最大範疇であるCPに受け継がれる（CP=bar.）。但し、複合WHの移動において、両始発移動経路が包含関係が形成する場合に限り、このIPのBC性(bar.性)の受け継ぎが停止する。
- (c) 直說法節にあるIPのBC性、あるいはそのbar.性は、上位の最大範疇であるCPに受け継がれない（CP $\neq$ bar.）。但し、複合WHの移動において、両始発移動経路が包含関係が形成する場合に限り、このIPのBC性(bar.性)の受け継ぎが発動する。
- (d) 同一のSPEC位置には、単一のWH要素が一時停止可能である。
- (e) DP中のD'、あるいはN'に直接支配された位置に基底生成されたWH要素の場合に限り、DはそのsisterであるNPをL標示し、当該要素はSPEC(D)、SPEC(N)双方に一時停止可能である。他の場合には、DはそのsisterであるNPをL標示せず、SPEC(D)、SPEC(N)のどちらにも一時停止不可。
- (f) 左分枝に生起するDP（ノ）のbar.性は逆転する（左分枝に生起するDP（ノ）に対するI'のL標示機能は逆転する）。

(iv) に関して、Rizzi (1982) は (b) の認容度が (a) と (c) に比べ著しく落ちると判断する。詳細は割愛するが、本稿の仮説 α' は、(a) と (c) を文法的と予測する。(b) は、3-subjacent と予測される (NP (DP) の主語が項であり、項の中間痕跡が消去されるとすれば、ECP は満たされる)。

上の仮説によって (7) などの文法性は適切に予測されるが、他のパターン（例えば、以下の (x a-b) でのWH移動を説明しない、

- (x) a. *il pane che_i Maria si domanda chi_j t_j ha mangiato t_i* (Adms (1984) による)

'the bread that Maria wonders who has eaten'

- b. *tuo fratello_i [a cui]_j mi domando [che storie]_j abbiamo t_i t_j...*

'your brother, to whom I wonder which stories they told,...

仮説 α' は、(x) の両文を誤って非文 (*) と予測する。そこで、仮説 α' を以下のように改変することにする。

仮説 α'' :

- (a) イタリア語においては、疑問詞WH要素と関係詞WH要素が弁別され、同種Wh要素を飛び越える移動は排除される。
- (b) 接続法節にあるIPのBC性、あるいはそのbar.性は、上位の最大範疇であるCPに受け継がれる（CP=bar.）。但し、複合WHの移動において、両始発移動経路が包含関係が形成する場合に限り、このIPのBC性(bar.性)の受け継ぎが停止する。
- (c) 直說法節にあるIPのBC性、あるいはそのbar.性は、上位の最大範疇であるCPに受け継がれない（CP $\neq$ bar.）。
- (d) 複合WHの移動のinitial traceが同位の位置にあり（定義上、両始発移

動経路は包含関係を形成しない), 而移動が一時停止不可の場合に限り, 当該 IP の BC 性受け継ぎ機能は, 基底生成された位置に関し, より左の initial trace (A) に適用され, より右の initial trace (B) に対しては, initial trace (A) に適用された BC 性受け継ぎ機能と反対の機能が適用される (BC 性受け継ぎの逆転).

- (e) 同一の SPEC 位置には, 単一の WH 要素が一時停止可能である.
- (f) DP 中の D', あるいは N' に直接支配された位置に基底生成された WH 要素の場合に限り, D はその sister である NP を L 標示し, 当該要素は SPEC (D), SPEC (N) 双方に一時停止可能である. 他の場合には, D はその sister である NP を L 標示せず, SPEC (D), SPEC (N) のどちらにも一時停止不可.
- (g) 左分枝に生起する DP (ノ) の bar. 性は逆転する (左分枝に生起する DP (ノ) に対する I' の L 標示機能は逆転する).

仮説 α' は以下の文法性に関する予測を可能にする. この予測, そして他のパターンでの WH 移動を検討した上で当該仮説を修正, あるいは廃棄する必要がある.

- (x) a. *il pane che_i Maria si domanda [a chi]_i, Luigi *abbia* dato t_i t_j
 b. il pane che_i Maria si domanda [a chi]_i, Luigi ha dato dato t_i t_j
 c. il pane che_i Maria si domanda chi t_i t_j *abbia* dato t_i a Luigi
 d. il pane che_i Maria si domanda chi t_i t_j ha dato t_i a Luigi

- 14) 註 (13) の仮説による Subjacency は, 単に構造情報に言及するだけでなく, 語彙的に実現されているか否か, 動詞が如何なる法 (Mood) によって実現されているかにも言及する点に留意されたい (後者の情報を実現情報と呼ぶ).
- 15) head-head 移動により, 語彙的に実現された I は C の位置に移動している.
- 16) WH 要素の中間痕跡が含まれる点に留意されたい.
- 17) 例えば It doesn't matter at all which side wins.
- 18) 概略, *wonder* = I do not know for certain (I'm eager to) と分析する ((9a) の文法性は, embd. SPEC (C) に位置する WH 要素 (演算子) による embd. I^{lex.op.} によっても説明される).

また, 関係節中の I は I^{ex.} であると考えられる必要がある.

- (i) [the book]_i which Tom bought t_i

この前提がなければ, 関係節中の VP と IP が bar. を形成し Subjacency に抵触することになる. スペイン語において, 項 WH 句の移動経路にある V の前置は一般的にその適用が義務的であるが, 関係節中ではそうでない (詳細は Torrego (1984) を参照されたい).

V¹, V², V³ の動詞分類 (S 構造における選択規制) と V^{+WH}, V^{-WH} のそれが異なる点に留意されたい. (以下の例における *will* は I^{lex.} つまり, 単純未来としての用法である.)

- (i) do you know when_i he *will* arrive t_i
- (ii) * when_i do you know he *will* arrive t_i
- (iii) * do you think when_i he *will* come t_i
- (iv) when_i do you think he *will* come t_i

動詞 *know* は V², そして V^{-WH} に属する. 後述する仮説 γ との共同により (i - ii) は, 適切にその文法性判断が予測される. 動詞 *think* は V³, そして V^{-WH} に属する. よって, (iii) は, S 構造における選択規制によって排除される. しかしながら, (iv)

は問題を提起する。(iv)は、S構造での選択規制を満足するが、仮説γによる規制 ($I^{lex,aux}$ の二重指定の拒否)に抵触する。結果として、(iv)は非文と予測されることになる。ここで、(iv)のタイプの構文をとる動詞が *think, believe, suppose* etc.に限定され、且つその語彙的な意味が「思う」に弱化している点に留意されたい。動詞の意味の弱化と、それに伴う I^{lex} 機能の受け継ぎの弱化によって(iv)の事象は説明されるであろう。 I^{lex} 機能の受け継ぎが完全に発動する場合、(iv)の *embd. I*は $I^{lex,aux}$ の二重指定を受けることになる。しかしながら、*matrix I* $I^{lex,aux}$ の I^{lex} 機能受け継ぎは完全には行われない。つまり、*embd. I*は、上の二重指定を受けていない。

次に、*will*が意志・予定を表す用法 (I^{lex})の場合について考える。その場合も、(i-iv)の *embd. I*はそれぞれ、 $I^{lex,OP}$, $I^{lex,aux}$, $I^{lex,OP}$, $I^{lex,aux}$ と指定される。この解釈では、(i), (iv)が文法的で、(ii), (iii)が非文と考えられる。これらの文法性判断を説明すると思われる一つの可能性について述べる。意志未来の *will*は、 $I^{lex,aux}$ の指定を拒否すると考えられる。これにより、(i-ii)の文法性判断が説明される。(iii)の *will*は $I^{lex,aux}$ の指定を受けていないが、単純未来の *will*の場合と同様に、選択規制に抵触する。この論法は、(iv)を非文と予測する。しかし、前述のように、*matrix I* $I^{lex,aux}$ の機能受け継ぎが完全でない(しかし、この *will*はその *sister*であるVPをL標示すると前提する必要がある)。結果として、(iv)の *will*は、完全な意味での $I^{lex,aux}$ の指定を受けていないと考えられる。この箇所の論考は仮のものであり、更なる検討を要することは言うまでもない。

- 19) VP付加とPP中のSPEC (C) からSPEC (P) への移動標示は省略する。
- 20) Barriers理論では、適正統率を先行詞統率へ一元化する提案もなされている。このように先行詞統率へ一元化すると、(a), (b)は双方ともECPに抵触し、両文の差異を説明できない。 δ をN (*claim*)とした場合の最小条件が適用されないとすると、(a)のみがECPに違反する。
- 21) (14), (15)の文法性判断は、Chomsky (1986)のものである。
- 22) 文法性判断がx-subjacentのXを「見る」とすると、(14)の認容度がより低くなると予測される。Chomsky (1986)は、(15)のパターンにおいて *embd. SPEC (C)*に付加語WH要素が生じた場合には更にその認容度が高まると指摘する。

(i) *what, do you wonder how, to fix t₁ t₂*

仮説Eは、(15)同様(i)を2-subjacentと予測する。(15)の文法性判断が妥当するものであるならば、何らかの予備仮説の設定が必要となるであろう。本稿ではこれ以上の検討は省くが、以下のように考えることも可能であろう。(15)中の痕跡 t_1 の(始発)移動経路上においてbar.性の受け継ぎが中断される結果、*embd. VP*と*embd. IP*のみがbar.を形成し、*embd. IP*のbar.性が上位の*embd. CP*, *matrix VP*, *matrix IP*に受け継がれることはない。1つの移動経路上にある全ての最大範疇に順次bar.性が受け継がれ、完全なbar.連鎖が形成された場合にのみ当該bar.が累積的に作用すると前提する。これにより、(5c)の痕跡 t_1 に関する移動は2-subjacent以下となる。その場合でも、(15)と(i)は同定度の認容度を呈すると予測される。

(14a), (15)と(i)の相違を説明するために、仮説Eを以下のように改変することも可能であろう(詳細な検討は他の機会に譲る)。

仮説F: (a) *matrix CP*において語彙的に実現されたI (I^{lex})は、その *sister*であるVPをL標示する。

- (b) 照合操作が成立する場合に限り、この I^{ex} の機能は matrix C の下位範疇化する [+Tense] CP 中の I に推移的に受け継がれる。但し、 $V^{-WH,NS}$ に関しては、 I^{ex} 機能伝達が阻止される。
- (c) matrix I^{ex} に対する [-Tense] $I^{ex.to}$ の独立性より、[-Tense] IP の BC 性の受け継ぎは緩和される（当該 $I^{ex.to}$ を主要部とする IP の直接上位の最大範疇である CP の bar. 性が相殺される）。

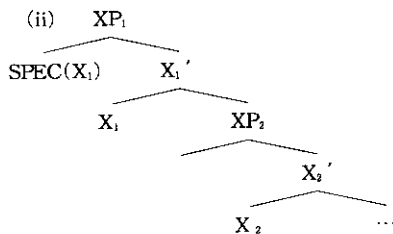
この場合、Subjacency と ECP に関し、[-Tense] $I^{ex.to}$ は [+Tense] と同様に複数の痕跡を同定し得る。(14a), (15) と (i) 中の痕跡 t_i はすべて ECP を満足し、embd. SPEC (C) の位置にある WH 要素の移動は 0-subjacent となる。後述する仮説 δ により、(14a) の $what_i$ と $[to\ whom]$ の始発移動経路は包含関係を形成しない。embd. IP の BC 性が上位範疇に受け継がれる結果、 $what_i$ の始発移動において embd. CP, matrix VP, matrix IP が bar. を形成する (3-subjacent)。(15) における $what_i$ の始発移動は、仮説 F により 2-subjacent となる。(i) における両始発移動経路は包含関係を形成する。仮説 δ により、embd. IP の BC 性は上範疇に受け継がれない結果、 $what_i$ の始発移動は 0-subjacent となる（移動経路は、基底生成された位置にある痕跡を支配する最大投射の連続と定義される。但し、S 構造の段階までに適用された移動 (S 移動) の始発移動に限り、基底生成された位置にある痕跡を支配する X' レベルの範疇も移動経路に含まれる）。

- 23) (a-d) の文法性判断は、今井・中島 (1978) による。Chomsky (1986) は (17a) を？と見なす。(e) のそれは Erteschik-Shir (1981) による。
- 24) 一方、N はその sister である最大範疇を L 標示する。どの主要部の L 標示機能を逆転させるかは、この場合、優先派生の原則に従って D の直接下位にある主要部 (N) となる。

本稿では限定用法の関係節内部からの WH 移動（例えば以下の (i)）が取り扱われない。また、WH 要素は SPEC (D) と SPEC (N) の双方に一時停止可能であり、D と異なり N はその sister を L 標示すると前提した。

(i) * $what_i$ did you see a/the child [_{CP} who_j t_j read t_i]

(i) を非文として排除するためには、 $what_i$ の基底生成された位置から SPEC (N) への移動を阻止する必要がある（後述の註 (31) により、embd. I はその sister である VP を L 標示すると考える）。つまり、この場合の WH 要素は t_i の位置から SPEC (D) へ移動しなければならない。英語の C はその sister である IP を L 標示しない。一般に SPEC (C) は一時停止可能な位置である。そこで、(ii) の構造における $X = (D, N)$ がその sister を L 標示しない場合に限り、WH 要素が SPEC (X) に一時停止可能だと考えることにしよう。また、同一の WH 要素は単一の SPEC (D) 位置に一時停止可能と想定する（SPEC (N) に関してはその限りでない）。更に、本稿の仮説 β を β' に改変することにする。



仮説 β' : 一般的に D はその sister である NP を L 標示しない、また D に生起する [+Definite] 要素は、より下位に位置し、且つ相対的に構造 (ii) の X_1 と X_2 に位置する D と N の L 標示機能を逆転させる。

上の仮説群は (i) と、Koster (1987) がそれにより Subadjacency の有効性を疑問視する用例の文法性判断を的確に説明する。

(iii) a. [which girl]_i did you consider [_{NP} the possibility of [_{NP} a game with t_i]]

b. * who_i did you hear [_{NP} stories about [_{NP} pictures of t_i]]

(iii) を除き、この仮説群は本文で取り扱われる仮説群と類似の効果をもたらすものとする。(iii)、そして他の WH 移動全般を射程内におく議論は他の機会に譲ることとし、本稿では仮説 β を採用し、SPEC (D) と SPEC (D) の双方に一時停止可能と考えて論を進める。

25) 母国語話者に対する調査は未実行。

(i) * who_i did you destroy a picture of t_i

(ii) ? who_i did you see a picture of t_i (?は Chomsky (1988) による)

(iii) who_i did you draw a picture of t_i

一般に動詞とその目的語の結び付きが緊密であればあるほど当該 NP からの WH 要素抽出が容易になると言われている。(iii) は典型的な再分析の適用例であり、動詞とその目的語が意味論的に最も結び付いていると言える。逆に (i) はその結び付きが最も緩い。更に十分な検討を必要とするが、以下に再分析によらない (i - iii) の説明方法を提示する。この方法論は (ii) を (i) と (iii) の中間項としてとらえるものである。(i) を説明するためには、何らかの意味で matrix V がその sister である DP を L 標示しないと前提する必要がある。また、(iii) のタイプの matrix I^{lex} が通例と異なり matrix V が下位範疇化する DP によって支配される主要部に推移的に受け継がれると考えられる。すると、以下のような体系が想定されることになる。すべてのタイプにおける I^{lex} から SPEC (N) への移動は全てのタイプに対して、 $D=a$ では 0-subadjacent ($D=the$ では、L 標示機能逆転により 1-subadjacent となる)。SPEC (N) から SPEC (D) への移動は (iii) のタイプで 0-subadjacent となり、その他のタイプで 1-subadjacent となる。SPEC (D) から最終着地点までの移動は (i) のタイプが 3-subadjacent であり、(DP, VP, NP が bar. を形成する)、その他のタイプで 0-subadjacent となる。

	タイプ (i)	タイプ (ii)	タイプ (iii)
matrix I^{lex} の受け継ぎ	*	*	*
matrix V の L 標示機能	*	ok	ok

タイプ (iii) の場合、matrix I^{lex} の L 標示機能が D に、更に推移的に N にも受け継がれる。N は本来的に N^{lex} であるため、二重の N^{lex} の指定を受けるように見える。しかし、matrix I^{lex} が直接その L 標示機能を伝えるのは N でなく D であり、matrix I^{lex} と N^{lex} が異なるタイプの X^{lex} である点に留意されたい (後述する仮説 γ に抵触しない)。

26) (19a) の文法性判断は、Chomsky (1986) の説明法によるもの。

27) 長谷川 (1986) は、(19a) のタイプを基本的に非文と (*) と見なす。

ここで、L 標示機能逆転が作用すると思われる事例について考える。一般的に、副詞節中には単純未来の *will* は生起しない。未来形の代わりに現在形が、未来完了の代わりに現在完了が出現する。ここでは、単純未来の *will* を I の実現と見なすことに

(i) は、仮説 β により t_1 から SPEC (N) への移動において t_1 が適正 (先行詞) 統率されないことなからも説明される (SPEC (N) から SPEC (D) への移動においても同様)。

- 30) 詳述は他の機会に譲るが、オランダ語では一般的に X^0 範疇、少なくとも C がその sister を L 標示すると考えられる。つまり、C の sister である IP は本来的な bar. を形成しないと考えられる。よって、当該言語では **[that-I]* effect は発動しない、これは、bar. の定義、具体的には、C だけでなく I に関する L 標示の定義それ自体がパラメータ化されることを示す。例えば、英語、スペイン語の I は一定の条件を満たした場合に限りその sister である VP を L 標示するのに対し、イタリア語、フランス語では I が VP を L 標示すると考えられる (スペイン語、フランス語における I の L 標示機能に関しては石岡 (1990b, c) を参照されたい)。

(i) a. [*which race*]_i did you express [_{DP} t_1^3 a [_{NP} t_1^2 desire [_{CP} t_1^1 [_{IP} to win t_1]]]]]

b. * [[*welke race*]_i heb je [_{VP} [_{DP} t_1^3 een [_{NP} t_1^2 verlangen [_{CP} t_1^1 [_{IP} te t_1 winnen]]]]] uitgedrukt]

両文において、 t_1 は ECP を満足する。註 (13) でイタリア語に対して仮定した左分枝に生起する DP ($\nearrow$) の bar. 性逆転がオランダ語にも当てはまる仮定すると、本稿の仮説群は上例の相違を説明する。(i-b) 中の DP は V (*uitgedrukt*) によって L 標示され本来的な bar. を形成しないが、当該 bar. 性逆転により bar. となる。その結果、 t_1^3 から matrix SPEC (C) への移動が 3-subadjacent となる。一方、英語では左分枝 DP ($\nearrow$) の bar. 性逆転は発動しない。

- 31) 本稿では以下の限定用法の関係節 (i) と話題化 (ii) について言及は行われなかった。

(i) the book *which*_i Tom read t_1

(ii) Tom_i, I believe that Bill found out that Jane doesn't love t_1

(iii) *who*_i t_1 remembers where_j we bought the car t_j

(i-i) 中の痕跡 t_1 は V (*read, love*) の sister であるので適正 (θ) 統率され、ECP を満足する。しかしながら、仮説 E は (i-i) を非文と予測する。例えば、(i) では、関係説中の I は語彙的に実現されず、また matrix I^{ex} の機能を受け継ぐこともない (当該 I は I^{lex})。その結果、VP と IP が bar. を形成し、当該文は Subadjacency に抵触する。この不備は、LF において演算子 (Operator) として機能する要素 (空の演算子も含む) が SPEC (C) の位置、あるいは IP (ないし CP) に付加された位置に生起する場合、当該 CP 中の I が I^{ex} として機能すると言ふ前提によって克服されるであろう。演算子の生起によるこの I を $I^{lex,op}$ と呼ぶ。embd. $I^{lex,op}$ は (iii) の文法性を適切に予測する。また、語彙の実現によるそれを $I^{lex,aux}$ と呼ぶことにする (本稿の (9a) のように、疑問・否定要素の共起を必須としない場合 (例えば動詞 *wonder*) の I を $I^{lex(aux)}$ と命名する。また本稿の考察の対象が S 構造の段階までに適用された WH 要素の移動である点に留意されたい)。

結果として、 I^{ex} は $I^{lex,aux}$, $I^{lex(aux)}$, $I^{lex,op}$ に分類されることになる。本稿では、これら I^{ex} の相違点に関する詳細な検討は省略するが、 I^{ex} の受け継ぎに注意する必要がある。

(iv) *what*_i did you wonder [_{CP} [_{to whom}]_j John gave t_1 t_j]

matrix V は V^{WH} に属し、embd. I は $I^{lex,op}$ である。照合操作の成立によって matrix $I^{lex,op}$ の機能が embd. I に受け継がれると、仮説 γ に抵触することになる。

つまり、仮説 E で言及される matrix I^{ex} の機能伝達は $I^{ex.aux.}$ と $I^{ex.(aux.)}$ に関するものである。しかし、(ii) で判明するように、空の演算子による $I^{ex.}$ は $embd. I$ にその機能を推移的に伝えと考えなければならない。

本稿では複数の WH 要素の移動経路関係は問題としなかった。しかしながら、Grimshaw (1986) の提示する例文、そして一般の LF 移動を勘案すると移動経路の相対関係 (具体的には包含関係) を考察する必要が生ずる ((v-vii) は Grimshaw (1986) の例文)。

(v) [which book]_i did the students forget who_j t_j wrote t_i

(vi) [which book]_i did the TAs tell the students [_{CP} t_i¹ that they shouldn't forget [_{CP} who_j t_j wrote t_i]]

(vii) * [which book]_i did the students forget [_{CP} who_j t_j told them [_{CP} t_i¹ that Dorothy Sayers wrote t_i]]

(v-vii) 中の痕跡 t_i は共に ECP を満足する。しかしながら、本稿の仮説群は上の文をすべて 3-subjacent 以上、つまり非文 (*) と予測する (IP の BC 性によって上位範疇が順次 $\bar{a}$ を形成する)。この不都合は移動経路に関する仮説によって打開されると考えられる。(v) の t_i から matrix SPEC (C) への移動 (始発移動) と t_i から $embd. SPEC (C)$ への移動 (始発移動) の経路は包含関係を形成する。本稿では、例えば移動経路 α ($embd. VP \rightarrow embd. IP \rightarrow embd. CP \rightarrow matrix VP \rightarrow matrix IP$) と経路 β ($embd. IP \rightarrow embd. CP$) のように初項と末端項以外の要素が長距離移動経路に完全に含まれる関係を包含関係と言う。つまり、S 移動では以下のような初項が共通する移動経路が包含関係を形成しない (つまり、共通部分関係を形成する)。



(vi) でも同様に、それぞれ始発移動経路が包含関係が形成する (仮説 γ は、*should* を $I^{ex.aux.}$ と予測しない)。一方、(vii) では、*who_j* の始発移動経路と包含関係にあるのは [which book]_i の始発移動経路でなく後続移動経路となる。S 構造の段階までに適用された移動 (S 移動) に関して以下の仮説を設定することが可能であろう。

仮説 δ : 複合 WH 要素の S 移動に関し、それぞれの始発移動経路が包含関係にある場合に限り、IP の BC 性は上位の (最大) 範疇に受け継がれない。

LF 移動についてはどうであろうか。(viii-ix) は May (1985) からの例であり、May はこれらの認容度の相違を PPC (Path Containment Condition) に還元する (しかしながら、May (1985) は PPC の機能発動プロセスについては言及していない。May (1985) は Pesersky (1982) に準拠し、それに若干の修正を加えている)。

(viii) ? whom_i did you tell t_i that Harry saw who_j

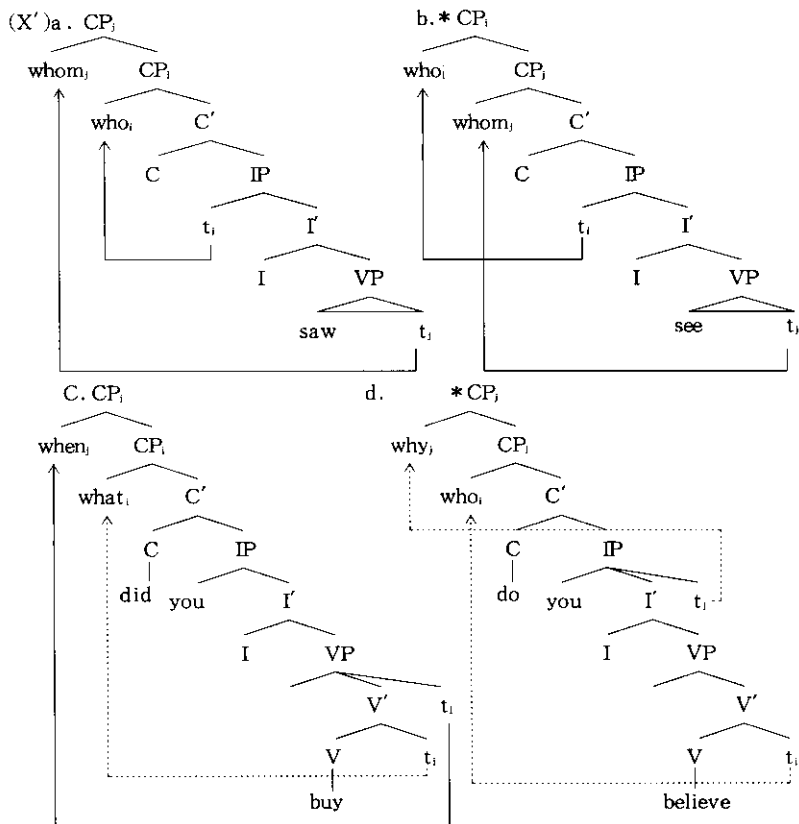
(ix) * who_i did you tell whom_j [_{CP} t_i¹ that Harry saw t_j]

(viii-ix) の相違は、以下の前提によって説明され得る (詳細に渡る検討は他の機会に譲る)。

- ① LF 移動では、項の WH 要素は SPEC (C) 位置に一時停止しない。
- ② LF 移動では、適正統率が適正先行詞統率に一元化される。
- ③ WH 要素の LF 移動は、CP への付加によって実現される。
- ④ LF においては、Subjacency は発動しない。
- ⑤ 一般に IP の BC 性は直接上位の CP に受け継がれるが (CP = $\bar{a}$), LF において、LF 移動と S 移動の始発移動経路が包含関係を形成する場合に限り、当該 BC 性の受け継ぎが停止する。

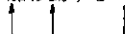
これらの前提は、優位性の条件 (Superiority Condition) をも説明する ((x'a-d) は (x a-d) の構造標示).

- (x) a. $\text{who}_i \text{ } t_i \text{ saw whom}_j$
 b. $*\text{whom}_j \text{ did who}_i \text{ see } t_i$
 c. $\text{what}_i \text{ did you buy } t_i \text{ when}_j$
 d. $*\text{who}_i \text{ do you believe } t_i \text{ why}_j$



(x a) の両移動経路は包含関係を形成するため、IP の BC 性が上位範疇に受け継がれない。よって、 t_i は ECP を満足する。一方、(x b) の両移動経路は包含関係を形成しないため、CP₁ が bar. となり、 t_i が ECP に抵触する。(x c) 中の指示的付加語 (referential adjunct) である *when* が IP に直接支配されると前提すると不都合が生ずる。両移動経路が包含関係を形成しないため、(x c) は誤って非文と予測される (つまり、*when* は VP に直接支配される)。 *when* が VP に直接支配され、同時に移動経路に x' 範疇も含まれると前提すると、やはり不都合が生ずる。この場合も、両移動経路が包含関係を形成しない (その結果として、当該文は誤って非文

と予測される)。つまり、LF における移動経路はすべて最大範疇 XP から構成されることになる。what の移動経路は VP → IP, when の移動経路は VP → IP → CP となる。その結果、少なくとも指示的付加語が関与する場合、IF では初項を共有する移動経路が包含関係を形成すると考えなければならない。非指示的付加語 (non-referential adjunct) である why の場合は、例えそれが VP に直接支配されると前提しても、初項を共有する移動経路は包含関係を形成しない。WH 要素が付加移動する LF では、一般的に



のような移動経路が包含関係を形成すると仮定した立論も可能であるが、本稿ではこれ以上の検討は省略する。

Koster (1987: 192) は、(x a) の認容度が (x b) のそれよりもはるかに低いと指摘している。

- (xi) a. * [_{CP} who_i do [_{IP} you [_{VP} remember [_{CP} what_i [_{IP} t_i [_{VP} saw t_i]]]]]]]
- b. ? * [_{CP} what_i do [_{IP} you [_{VP} remember [_{CP} who_i [_{IP} t_i [_{VP} saw t_i]]]]]]]
- c. * [_{CP} what_i do [_{IP} you [_{VP} wonder [_{CP} who_j [_{IP} t_j [_{VP} saw t_j]]]]]]]
-

(xi) 中の痕跡 t_i は ECP を満足する (matrix I と embd. I は双方とも I^{lex} と指定される)。よって、(x a) の非文性は仮説 δ によって予測可能である (両始発移動経路が包含関係を形成しない)。(xi b-c) における両始発移動経路が包含関係にあるため、仮説 δ は当該文を文法的と予測する。明らかに、この予測は事実と合わない。最初に (xi c) について考える。(xi) の matrix I は $I^{lex.aux}$, $I^{lex(aux)}$ と指定される ($I^{lex.aux(aux)}$ と表記する)。embd. I は $I^{lex.op}$ 、照合操作の成立により更に $I^{lex(aux)}$ と指定される ($I^{lex(aux).op}$)。つまり、ある一定の条件下で $I^{lex.aux(aux).op}$ の指定を阻止することによって (xi c) は排除されると考えられる。そのために、仮説 γ を以下のように改変することにする (言うまでもなく、(xi c) の非文性は LF 移動規則によっても説明し得る。しかしながら、S 構造で ESP を満足する要素が LF で同一規則である ECP に抵触すると考えるのには問題がある。Aoun (1986) の γ 標示 (γ -marking) を想起されたい)。

仮説 γ' : 主要部範疇 I は、直接に同一タイプの I^{lex} 指定を二重に受けることはない。また、複合 WH 移動において移動経路が包含関係を形成する場合、同一の I が受け継ぎによって同時に I^{lex} 指定 ($I^{lex.aux(aux).op}$) を受けることもない。

前述のように、本稿の仮説群は (xi b) を文法的と予測する。それでは、Koster (1987) における当該文の認容度 (?*) はどのように説明されるであろうか。(xi b) 中の who_i は (xi a, xi c) と同様に SPEC (C) の位置にあると、つまり who_i は S 移動すると前提している。matrix V (remember) は V^{-WH} に属す (remember は V^2 に属す)。換言すれば、当該 matrix V はその sister である embd. CP の SPEC (C) 位置に WH 要素の生起を必須としない (当該 embd. SPEC (C) は空である可能性

がある。matrix V (*wonder*) は V^{+WH} (V^3) に属するため、(xi c) の *who_i* は embd. SPEC (C) の位置にある)。つまり、(xi b) の *who_i* は基底生成された位置である SPEC (I) にあるとも考えられる。その場合、*whom_i* は LF 移動することになる。前述の LF 移動に関する規則によって、当該要素の移動は阻止されることになる (ECP に抵触する)。

結果として、*who_i* の生起する位置が二様に考えられ一種の共鳴構造 (resonance structure) を形成する。この共鳴理論が妥当であると仮定するならば、以下の (xii) で提示する Culicover and Wilkins (1984: 179) の文法性判断 (*) には問題があることになる。

- (xii) * what_i does John know who_j (t_i) saw t_j

参考文献

- Adams, M. (1984) "Multiple Interrogation in Italian." *The Linguistic Review* 4 pp. 1-27.
- Aoun, J. (1986) *Generalized Binding. The Syntax and Logical Form of Wh-interrogatives*. Foris, Dordrecht.
- Baltin, M. R. and Kroch, A. S. eds. (1989) *Alternative Conceptions of Phrase Structure*. The University Press of Chicago, Chicago and London.
- Belletti, A., Brandi, L., and Rizzi, L. eds. (1981) *Theory of Markedness in Generative Grammar*. Scuola Normale Superiore, Pisa.
- Brame, M. (1982) "The Head-Selector Theory of Lexical Specifications and the Nonexistence of Coarse Categories." *Linguistic Analysis* 10-4 pp.321-325.
- Brucart, J. M^a. (1987) "La Elipsis Parcial." in Demonte, V. and Lagunilla, M. F., eds. (1987) pp.291-328.
- Chomsky, N. (1986) *Barriers*. MIT Press, Cambridge (Mass.).
- Cinque, G. (1980) "On Extraction from NP in Italian." *Journal of Italian Linguistics* 1: 2 pp.47-99.
- Culicover, P. W., and Wilkins, W. K. (1984) *Locality in Linguistic Theory*. Academic Press, Orlando, Florida.
- Demonte, V. and Lagunilla, M. F., eds. (1987) *Sintaxis de las Lenguas Románicas*, El Arquero, Madrid.
- Erteschik-Shir, N. (1981) "On Extraxtion from Noun Phrases (picture noun phrases)." in Belletti, Brandi and Rizzi eds. (1981) pp.147-169.
- Fukui, N. and Speas, M. (1985) "Specifiers and Projection." *MIT Working Paper in Linguistics* 8 pp.128-172.
- Grimshaw, J. (1986) "Subjacency and the S/S' Parameter." *Linguistic Inquiry* 17 pp.364-369
- 長谷川欣佑 (1986) 「Barriers 批判」 月刊『言語』 15: 12 pp.84-94, 大修館, 東京.
- Hernanz, L. M^a. and Brucart, J. M^a. (1987) *La Sintaxis. 1. Principios. La Oración Simple*, Editorial Crítica, Barcelona.
- 今井邦彦, 中島平三 (1978) 『現代の英文法 文II』 研究社, 東京.
- 石岡精三 (1990b) 「Torrego (1984) の再解釈—GB 理論の観点から—」『長岡技術科学大学 言語・人文科学論集 4』

- 石岡精三 (1990c) 「GB 理論研究ノート (III-2) — 属格句を伴う名詞句の統語構造について —」『長岡技術科学大学 言語・人文科学論集 4』
- Koster, J. (1987) *Domains and Dynasties. The Radical Autonomy of Syntax*. Foris, Dordrecht.
- Kroch, A. S. (1989) "Asymmetries in Long-Distance Extraction in a Tree-Adjoining Grammar." in Baltin, M.R and Kroch, A.S. eds. (1989), pp. 66-98.
- Lasnik, H and Saito, M. (1984) "On the Nature of Proper Government." *Linguistic Inquiry* 15-2 pp.256-289.
- May, R. (1985) *Logical Form. Its Structure and Derivation*. MIT Press, Cambridge (Mass.).
- McCawley, J. M. (1988) *The Syntactic Phenomena of English*, I, II, The University Press of Chicago, Chicago and London.
- Milner, J. C. (1982) *Ordres et Raisons de Langue*. Seuil, Paris
- Pesetsky, D. (1982) *Paths and Categories*. Doctoral dissertations. MIT, Cambridge, (Mass.).
- Rizzi, L. (1982) *Issues in Italian Linguistics*. Foris, Dordrecht.
- Riemsdijk, H. C. and Williams, E. (1986) *Introduction to the Theory of grammar*. MIT Press, Cambridge.
- Stowell, T. (1989) "Subjects, Specifiers, and X-Bar Theory", in Baltin, M.R. and Kroch, A.S. eds. (1989) pp.232-262.
- Torrego, M. C. (1984) "On Inversion in Spanish and Some of Its Effects." *Linguistic Inquiry* 15 : 1 pp.103-129.
- Zagona, K. (1988) "Proper Government of Antecedentless VP in English and Spanish." *Natural Language and Linguistic Theory* 6 pp.95-128.